



ことはくつ

文化文政頃

東路の言はの

ふあけおとせにわたり
こゝろ申す神ももの久

塊翁

旅人の牽きも新や甘き津原
みけと強き向も浪のききあは
軒まに寝れもすくぬ煙の雲
主路のつらきわたりもなれど
名月とをいふも只あはれ
冥のたより舟もあはれ

沙鷗
月庭
雪后
而后
金樵

藤入り瓜さくら飯の泡
七ツと〜と登るの〜言
舟場ふれ人〜か〜
ては河るあり漏り也〜
むら火の流よさる月山
り雀餌つる。山彦女の雛
檢校は鳥筑ふら〜
ま〜〜〜

川 碓 鹿 野 鹿 樵

木の尾結帯〜と年の新
簪の髪〜花も結傘
よ〜〜の〜も〜山吹
清信す〜あに新あ〜
あ〜〜と〜た〜の〜
〜〜〜も春の〜の〜

后 碓 鹿 野 鹿 樵

花津を〜と〜と〜
〜〜に〜あ〜の〜

森す高自ら花の影ふく河の
浦千のあはれもあはれあはれ
こゝろのあはれもあはれあはれ
三里をいづ川東にわたりあ
ひあはれ自れのをあはれあ
はれあはれあはれあはれあ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

徐英

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

楚山

痛くもあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

塊翁

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

山 山 山 山

少くすゝたふく清の遠き
 梅央
 よく神のたふあふ鼻の
 冠市
 佛の身も世も心も念も
 山
 輝路木下に暮いかたれ
 央
 益島のひらもまぬ水の音
 壺洲
 富士の山津の山の煙草
 山
 鶯のつらね初りし柄の
 市
 高津のしらねの法
 河

花の葉たぐ煙の中乃月
 山
 こころもさくら氏神結
 市
 旭の葉たぐあけのまの
 河
 流もも春の結惜まり
 山
 春ももた雨の眺ももむ
 大巢
 五尺の世を摸させもせぬ
 巴梁
 草もも猫に少判と摸
 鳥
 新の写させぬ春の結
 巢

ふた筋ハ清水に交る温泉の湯
盃ふくしの恋のこころ
廻れと鹿目にくけて鳥の
急仏護に入し山伏
窓木のほろろと拂心月
まの鳥の息をせたくは
丸盃に大治の巻と解を
桶狭間うら伯子にえくれし

梁 巢 梁 梁 巢 梁

赤くは浪には世やうら
有は一矢に思ひ果たり
みあうしの丁も路も明
をうとたげくる頂花を
長空の都入つて新車
くまの層さへくまの月

梁 巢 梁 梁 巢 梁

田楽の意をいふ歌と由は二村
山くやも山もむくの作はあ

このうらさき海僧は乃す野られ
山とらの沙はあへんやいばりて
まゝ久いり休む程の中に一時流り
多洲の起るまじけしそはむしく
徒ありん只舟さきの雲はま子遊
牛にわたるらさくあけりて
夕能いさる膚のあけりてあけりて
まゝ野集りての娘入るはまたし
中さしやせん田系とて

平舟

島にる流り

新川浪も流るに

まゝ野集りての月

田江

流りさや戸の明もも
人志つゆりく端幅乃月
山峯さるるのより高はれ
まは中まき舟と引す
芥也の消るるのつらひ
ゆきとけりて脊戸結る

塊翁
山阜
紫黒
守栖
竹河

於〜子よ言傳と〜九月に
浦く良如減結夕言の相
おと〜お上野の鐘の響一重
小春のさ〜〜誰うま〜
幼子ま〜〜燈〜のせ水〜
狐の夢に似〜。木兔
本地歌の〜ま〜の〜
皆う〜〜〜本食の札

翁 江 島 岸 河 栖 江 翁

輕筋のりあひ〜に牛遠て
きのふハ軍々〜を輝け
朝魚の月い〜之〜
〜も涙と〜端柳
信楽の土器化り老に〜
勅衣の袖を〜せに〜
祓き〜と岐の神や〜ん
〜〜〜せぬ〜

阜 馬 河 江 雨 耕 花 央 山 美 岡 里

紫陽花の色も水の流るは
 夕日斜に相ふ蚊とん日
 馬控にや。七村の西の江
 へとりくも温るの香うく
 そらふりのすく惟恐う瓢を
 めうらふせぬをすくおの言
 坐袴の裾もそ蘇のおく
 負の粟と宝ふ 雇人
 其培 以言 龍散 柏臺 舂 舂 舂 舂

家の棟の高きもひのすく
 夕日斜にやの意はく
 考の痛の東へきれる橋の上
 蘇々圓へ又えは萩の芽
 あらふも一へ向くね若狭鞠
 言紫層あきき春の春は長
 舂 舂 舂 舂

清洲の記ふりふりて城の路を
 田とほく袖とあれ人宗のまうり

智りの足毛雪の影八人終終をぬ
雪もくしつ更なる戸ののちいれし
五雲川の月をこむしし月を
すめつとせきさるるの能くさるひ
くくはは風潮枯川のあまに
流るるもくもくもくもくもく
大阿くく月よさるる

清海の驛

鳳臺

嵐の海きの

こころの海きくく
人こそ悲しくうたれ

沙鷗

寺の海根も枯れは海をぬ

立舟の勤く池水は月

徐英

竹葉中た古葉はくふの雨清て

鳳臺

鞭にありとせり守はもくく

我竟

むれそくたら仲海の汐はり

塊翁

浦苔一ひくとめ良くとく

雪居

山鳥の尾よりつく整とてもの物
 伊吹と見せとく藤せの牛の子
 ひくるさきも面をたねの面目し
 硯の底のぬきはきまの月
 何れも瀧よりゆく耳の端
 駕かきしとも赤たれ花の実
 娘むより控られし春の月
 流るるをりり若草燕のさか

而后
 茂東
 樗康
 菊雅
 扇之
 呂川
 金樵
 吳山

新膳と古代よりきたる舟の骨
 くらもり作田も淀もり春月
 夕風入るのころ瀧は吹房り
 八重山岬にね女法せり
 またまは園の男の白柳とて
 川中真つと細はきくあは
 日影をさし雨をさすのつらき
 くらしむらひて人しむし

如三
 楚角
 九江
 花軌
 亮
 亮

世は時を白くもすもす 如雲の縁
 石の減りや水は流すらん
 西の月の影を合とすらん
 蟻も又にはまゝ 葉の影を
 朝白いともかたに 蟬の
 母は給と贈る有明
 嬉しき影は守山の影も
 同く幸す。一むれのか
 糸
 糸
 糸
 糸

朝日やまが葉の影を
 きたる枝の影は根うけ
 春の香は蝶の影を
 春の影は日うあつと照す
 静の影の影を果る
 春の影は日うあつと照す
 糸
 糸
 糸
 糸

秋の夜寒の星は省は人
 まるはまらもく 秋の影を

ふりてゆく〜の〜ゆひ〜もたれ
さの〜意〜も窓〜後〜し〜ゆき
ゆり〜海〜と〜風〜と〜あ〜し〜ゆひ
能〜得〜ゆ〜り〜あ〜に〜さ〜ら〜入〜江〜地〜の〜相
美〜の〜里〜の〜家〜に〜さ〜ら〜入〜江〜地〜の〜相

冰漢

山崎よりなる秋の

さ〜ら〜に〜あ〜る〜ゆき
〜に〜あ〜る〜ゆき

塊翁

子郎のあ〜る〜ゆき〜に〜あ〜るゆき
ゆき〜に〜舟〜と〜あ〜るゆき
ゆき〜の〜さ〜ら〜の〜月〜と〜あ〜るゆき
ゆき〜と〜あ〜るゆき窓のさ〜ら〜風
ゆき〜と〜あ〜るゆき小館のあ〜る色
ゆき〜の〜あ〜るゆきのあ〜るゆき

未巳

鹿野

午風

芳水

可竹

柳重のまの穴地はねらり
瀧のやうの鈴とつとれ
逢坂の園のあふた夫持を
末持を法やうね咲す。
影あき月をそ枯の定ぬ
踊のゆはとよせお 漣
はれは杖見とあは露の
つとれともあふ 嘆の鶴

巳 翁 風 野 水 芝房 耕至

花瘡神のまの穴地はねらり
夢離ふんを流す門川
是さうり山のまの穴地はねらり
た古はやの意句を
袖まの少あを捨ふらつ世貞
秘るぬ人江似る 白鷺
まのまのまの観るのまの
まの扇の風もはる 紫雲

蘭雅 夢朝 至 房 百賢 雅 胡 賢

沙良井の凡の白ひう目よ秀
つやあまひむねのわし先
伝知の松はまね三つ越て
風呂の中うゝ隠しあや
振返りぬに月をうけを担
来りぬみしをそちきり言
音もさすやち所の松石
あつのも又こねほね子の年

胡 翁 胡 翁 胡 翁 胡 翁

昔々新戸は結新夢かたて
牛のあふく砂よりさる
細流の光りた風の吹あつ
つもあつた眼うへゆし
かきく来ぬ老の老所七所
あつと葉屑まき書けり春

胡 翁 胡 翁 胡 翁 胡 翁

山崎にうゝそ機部の里をゆき
かり舟さふ方中をこゝろふ山崎

少くも人の心の一掃す。小徒
 ありたるたはは度程のみ
 江戸のまひの屋法
 新古ある人々のまひあり
 書も千里也もあつて
 一掃すといふも

大蘇

葉の名は言部層ハ五ツの巻力
 一の字小四ハ一と人名の孫を
 乱雑すてまも其賊者若と
 次小拾録名録ハ而后小言を以
 一の字小四ハ一と人名の孫を
 乱雑すてまも其賊者若と

次小拾録名録ハ而后小言を以
 一の字小四ハ一と人名の孫を
 乱雑すてまも其賊者若と

名録のまひまひやふふあつて
 海内一連のまひまひをまひまひ

大鶴庵塊翁

名録

赤河のハ赤河く種花の家の

而后

四神のつゝあはれ梅乃みほひうふ

人言

ほくまに赤の毛五尺のあやめ子

童行

赤河のハ赤河く種花の家の

一聲

善や赤河のハ赤河く種花の家の

一居

十六赤河や雲のゆつゝ山の赤

一猪

乞ひりもあらう雨敷の宇都の山

一岷

十月の日は紅さよ四雅漢堂

一湖

澤むす雨籠新をとりりり

湖丈

湖の赤のふとえうう湖乃風

湖水

鴉妻や睡みくる赤乃毛路

蕩水

雪や赤赤拾心ておる障も

晶水

ちるまをいと言くハ雲のま障

東水

猿母やさるふおる丸木橋

都水

まののりやまをとりりり

流水

心海をふゆらねるうあ苗とま

采流

春の風報つと氣は事なり

洗耳

耳を渡ふ乃梳すの石小齒をみくくの
まきらうししううらむ人のあしはつ
三河の困り弘法に所は抄筆のあし
阿多名号り池と山寧らるるの思議は
雲を踏ふあまうと方とす 既不杖をむきぬ
必名しの石ふあしと 輕し

拾ひとらましく石と物くも 逆古名

トホタフミ

龜石

昔のお八目泥山はたむひたり

記石

つりは目もたらのしくめたえれ

石羊

りくく小聲の響あたる 芒の音

石廬

ちる是はる勝好目と見えけし 雲

石鹿

物丁子門をさし 音即ちまうれ

蒼石

粥喰く膳み美ししうめれ 雲

蒼紅

雲の雨さる形くも 晴るまわり

蒼虬

ちる雨はつやみ 照あふ池の端が

虬道

道ハ山道 谷に坂さるるあゆみ
とらひしあまうもあまや猿のあしはつ
先葉のあの方のけりしとらひしあゆみ
とらひしあゆみ

山の月とらひ安き六洞のてぬ

五道

とらひしあゆみとらひしあゆみとらひしあゆみ

五杉

老もあしと 薄らむむ向の暑さか

五萍

とらひしあゆみとらひしあゆみとらひしあゆみ

五雲

共

きつりさの中を穿ちて芝を掘

歸雲

首の藤をよこした月あつれ

雲止

十世おの月あきあはふらうらう

吐雲

あまふ海の水のきやほたけ

岱雲

初丁やふらう雨り降て来る

岱呂

柿の葉は習ふえゆる奈余りか

呂川

いとちあききりも時雨は山あふも

鳥川

鶉のよけ子おんまゝのこれ

鳥翠

鳴るもや門田の鳥はむとあく

東羽翠

赤鴉の志をよこして新法はか

羽翠梅

雪ももろぬころうすふらりや水

変翠

西ふらあねを入らまゝ三日月

有変

牡丹もくくとやせ二日月

変中

子子や月もうつらぬ水の井

倭中

あまの根も葉もよけはひさし

其中

ふたふた暮るやうに影のくれ

其映

松原や小雨の中をとくたれ

其柏

茶に酔て白酒美味は山崎か

其倍

鳥子の西口すうすや岩の根 其笑

水色乃をともすの物ありし 其松

落鮎や道もなるとも海の中 寸松

うゝ舟の流れありぬふをゆめ 寥松

移るに津くありまぬ春のあ 松亭

雲さくと雅うさるる雨 葵亭

鈴風やうゝあはるる鴨のあ 鱸亭

みづの流のさよふも残し 橘亭

名月やあはるるもあはるる 楚橘

いづり小窓の月を舟に寄せて誰や訪る哉
うはやまぬらむと心もちつ観てむうたに
あはるるさうすみくあはるるこのゆきも
あはるるさうすみくあはるるこのゆきも
世と推人の海山位也もあはるるあはるる
あはるるのせらるるあはるるの月をよめる

月あはるるあはるるにう新法也 楚雀

月と雲とあはるるれるる 楚角

雨晴くくしや幸とれ夕まき寸 楚山

輝のあはるるの遠きあはるるの角 花山

春あはるるあはるるむ花乃蝶 旭山

まはるるあはるるのあはるるあはるる 龍山

暮らるる山ふの遠しなるの月 静山

月をさるる人れあしなるはく 守静 エト

見さるる人の影は夕すみ 守拙 エト

あしのかやまはもなきの山 守三 エト

幸崎は春えくあく郭へ 三貫 ミカハ

桐咲や脊戸へおれえ 三岳

花もふえあられあやぐりも 葛三 サカミ

梅柳子等うたひの美しき 鳩三

昔未切くあふさきぬ心の 暮三

朝の雲はくはく吹く山窓う南 如三

飄るも路ゆくぬせよをら 如斐 ミチノク

ゆき雪は奥の山くも牡丹う 如高 ミカハ

雲くくく六峰中む雪のま 丘高 イセ

あしや野田空をさるるあうり 始丘

雲もさるるえゆれを等をしり 南岳

昔年の思ふ山はくつて 東岳

あはれもさるるあふさかの 岳輅

輝乃雪や山影も人のあはる 至岳 セントアイ

嘗の気みゆきふ山麓の如
 耕至
 きまらう遠のともろ子春の月
 雨耕
 とし隠すみのもあれし世の春
 雨考
 人よをく鹿乃澄うし芽の端
 蕉雨
 身より紅雪や小雨の初うら
 蕉兮
 好口むけえうしらの世う初ふし
 蕉兮
 名月は頂をえゆるまの砂系
 五兮
 名月の影りと追集りけま
 五樓
 ア、川きアし六水の春の影
 五穂

落さう形星うおどり 郭云 ナカサキ 五英
 菊も人もあまは伝ふる山麓
 徐英
 岩木城人あひたり保古る
 路英
 雨と果ぬくみう物集を菌狩 ナニハ 路舟
 雲の風花乃中へそ入るる
 路郭
 同子又申る水やを管は曲り道 ミナクラク 荳路
 春の宿や水鷗をよめる軒の門 ナニハ 公路
 子子の流るまても浮子なり 女 宜公
 人乃来く差るる砂りそ本蓮花 宜格

紫陽花や垣をとり徳の妻をいふ 宜彦

朝をとりしてゆく半ぬ満の月 十二ハ 彦彦

花を好思ふ子梅はをゆるし 五ト 彦彦

河を舟の舟をそくをり勝自 アフ三 道雄

をるる雨を遠くすも也菖蒲の山 豊雄

室を梅を車漕舟の子能成 彦彦

むらむらとまらや波を馬刀の穴 ラク 雪雄

那らけのまををりて海の月 雪君

新あし守膝も涼しあやめ彦 十二ハ 月君

于物の小石揺む才小妻の南 菊君

あゝあゝと花をむる小の菊はを 三ノ 万菊

けりあめしんを女乃まき子乃菊とひ小
名をあゝとせしえよりあひかくこひ
ぬく松をのあゝしう九月九日のひま
まはゆめとくもいとあそれ也

湖をねく亭山壽ハを也音の松 ナニハ 万和

去来はふ老もむら深古音 万也

名月やさきも是る浅草の院 イセ 風也

羽音はうつ門の河を鳴り田が 五ト 百也

松風乃落く東を入海雪が イナハ 百無

影重は澄くもあむ山家くね

イセ

已百

大津 弦子りれし佛よ神くま

イセ

推已

節もきりし稲妻 落くあもふ

イセ

巴推

月と歌と初時 身守みけり

イセ

巴杖

切く伸くお杉お玉も十宿が

イセ

巴陵

山の隈や月いふれく鴉乃海

イセ

巴梁

嗚く不橋みとくかよひふ

イセ

巴洞

又しても柵ふあくよく狩人

イセ

鬼洞

大鳥は重くものさきくうれ

イセ

洞く

梅橋と鹿もあしう朝の月

古洞

くくくや赤ち山を飛鳥

イセ

古陶

きり柳の帯も流きりなま

イセ

宗古

灯をくく鹿きく燈根定たり

イセ

瀬古

大津けりの海家をかぬ小家

イセ

珉古

月よりくくやとくくおのよ

イセ

玉洞

嘗ハ菰よりあるくくさる

イセ

玉之

くくくくくくくくくくく

イセ

白之

志くくは果経東の文くく

イセ

扇之

大佛も之由る中中の世も子 二扇

とほりゆへに世もすくぬし帰巻 ニムシ 乙二

足の香乃吐くもつりし蓮様 扇二

芭蕉の歌も入る清くしと之もなり ニヤ 青扇

月代のそくも其のむも分 司青

凡の蔓も探くちきる月夜分 司

つらきく右辺のそくをれ
左辺のそくをれ

橘乃常尔ぬも烏帽子系 君迂

堂や舟の新も昔乃存也 曾洛

むやくと家も実の入水の分 永在

あはしも亦人來とつれ路の分 イセ 永南

月しとれをれ張る夜も分 槐南

西むらし 花もつらく坐し分 ミカハ 槐舉

生動にうら越ふ人初松魚 槐磨

唐鳴や墨もあれきるその海 カミツテ 草磨

むらぶの柳橋もつらく分 ヒコ 久世磨

物下れむらむらむ月も分 ムサシ 南天磨

みくし雪も章もねも分 ニヤ 賈天

旅人の柳子をくむる日数うむ 木天

子鳥を高くせらる四月か ミカハ 木芽

新言や隠れ笑す。暮の字 トホタフミ 木南

人きくう岸火をせらうと野の雪 石南

月代や通うぬけらるるの雲 南雀

あらしをうらまされし火を焚き立二か ミカハ 仙雀

名月のあらしもさき月夜ふ 雀人

室の菊のひらめきさき ナニハ 羅人

此秋も人の菊をさすまきあり 三津人

落葉うら山へくすや袖の哉 ミチノク 曰人

大室の毎朝ぬれく深き春 ニチノ 哉曰

雪の小風永き日とさく思ひはる タシハ 衣階

早しき月をさくめく園扇 ラク 金陵

初まはれ以帯ふあき ラク 金葉

雪解の世押やれく山河を ラク 金樵

つをけえ新くアはけふはる ラク 夏樵

あ月あはれまのこ古き竹の屋根 アフミ 南柯

谷乃乃えのちちいささハ
山の上を溪谷を流る

飛雲 遊より通る人小似る アフミ 亞溪

三 溪小あるまじくハ

とら風とふりありけり枇杷 サツマ 棠棣

海もよやたそ白濁の清んく切 サツマ 檮康

鼻波にこそするみ虫のは月か センタイ 立枝

旭こそささくれ風のうれををか キツ 丈紫

りぬふ心の流やあつ乃月 キツ 千丈

松山も柳も白もむらうふ キツ 千之節

小島の起る

赤ハ夜中月ハあらくと時を危 イセ 湖洛

湖洛山水邊をかよ

松ののびて層をよそけ志をりか イセ 泰浦

梅おとあそふもあうり イセ 誘帆

ほのくれや海より舟の山好灯 イセ 九江

三河の玉風流泉子入湯す飛泉
洞と岩頭寒くも勢勝ふ志む

公流よ鬼をやす五月の七 トホタフミ 東江

きこのあうく口うめくおほけ アフミ 宇洋

こしらうく先へ迹をそ猫の窓 イセ 涼濤

菫の紫はほろりとくしむる

東雅

入梅時や百足の舟小松原

茂東

初鰯や志つた残るサ萩の月

茂恭

狭きも信え月照むらや

茂良

植く木の系根つきは里時鳥

良俣

望山もつらき管絃の方角

良平

月おうけし急のあまき福うた

平角

桃喰や人殺そくあつの上

平赤

あれは安井川おちく上巳の
福しそめりしあけり

え徳く鴨ふくれくまのり

鈍糸

入おと持をくしるさきさ

篁糸

昔非小月押空の寒くさ

葛糸

馬市のあやや杖おまの日のるみ

雨糸

新魚の片端のまつれそ嬉し外臨

雨樹

焼飯の冷きまきや心月の船

雨里

釣の写や凄ふまふ新法河

里春

川心の夕も美を鳥のほろり怪

春喬

洞のくさきして八幡やう秋の雨

春阿

大木戸の種へきみたりし阿頼

阿頼

以て龍を呂律のし

髪をくくもやまのり後子の世し サツニ 呂槃

こぞ鳥小涼しつとや岸の空 アフミ 素律

雛のりや山京の舞のふ風呂 シモフサ 素月

初家のあは節ねくた二日月 シナリ 素葉

雲よとる心やうけてさま ラク 素童

浮やくと夕風あしそは河 素介

正うなまも海りや 素剛

あは禁あて一々海り深古 素曉

素は白はあはるる

生の中ハむのむしき 只白

おもひむよあはるる 野白

それほよの仕あもえ 白龍

陣を司小せう 五龍

まう 龍敬

あ 龍士

き 虎男

病記くく山をる菴や初あし

席十

龍虎相繼ぎて亦隣く馬車

その紫も庭てもふし松のあ

七馬

十五和乃月やしらふりり

エト 馬來

碁やけく世の子を申ふいぬの

騏上

夕とねや芒の舟のいよま

耒車

菊持くむく遠く申くう

花軌

わつるまきと沙の引くる

花鏡

涌くはまじりあありく

イツモ 花叔

思ふくハ強ぬよのわ

ミカハ 花好

白梅ふく小籠のゆふり

女 松花

わく梅はく

花央

の

梅央

伸く鷹はあ

帯梅

踏のせ

ラク 梅價

月よ

梅回

梅子桃子

野

タニハ 野楊

山崎を越く峰にそゆる戸け 女 光揚

山崎の麓柳の山崎肥子にま イセ 桃園

梅の由とくくくくく ヒカ 桃初

おつもえつに軽く イセ 桃鳥

り イセ 歌鳥

飛石ふ水流く イセ 鳥島

さつねの 孫羽衣の
山のふりまおの夜

き イセ 左綾

ら イセ 左明

宿 イセ 苔明

宿頭盧を イセ 鹿明

高 イセ 鹿野

イセ 北埜

イセ 野衆

雨見山野一片種

月 イセ 山芝

イセ 山羨

イセ 山鏡臺

漆貝子より海へゆく葦の菊 柏臺

申ふくれは古し難し難し 杖臺

曙やおもしろい 鳳臺

けしきよらうと沖の鷗の菊 友鳳

風の移ろくをえれえ

廿敷道やまきれきりた 大巢

初子の家松村子をりふらま 大蘇

生草砂乃らそけしき 大阜

山ちの陸をいもまきれ月 山阜

りそくそ敷木子をし 呉山

月もく鴨ハ舟沈く 竹山

何鳥の迹もそ度のも 竹河

深古鳥鳴しや今 對竹

君う代のはあそく 對秋

今も来し何れも 秋竟

人聲の涼しくさる 女 李競

埋樋乃きもまき 李尺

言も形もあそ 李東

高野や 此野の妙の一里塚

木子風

岩の隈や 雨をまじりて 苔の色

三ツハ 李風

初冬や 雪舟の舟守り乃東

エチコ 和風

風乃 汗くくや 春は枯るる

ナカト 羅風

きくの 鳥か 赤い鳥を みるみる

風蕉

まを 龍世ハ 竹舟は 月夜うね

風六

しるるや 空をゆく 月の身なり

莊六

山吹や 舟をこぎ 舟をこぎ

エト 可六

鶴屋や 舟をこぎ 舟をこぎ

可了

其の字をすすむ 月の流水が

可屋

春の氷乃 氷乃の氷をす

壺屋

押も 氷乃の氷をす

サツハ 芦屋

この鳥は あらゆる 鳥をこぎ

ナニハ 屋鳥

陸舟の 馬よ 氷乃や 春は枯るる

暁鳥

ささる 氷の山や 氷乃の氷をす

サツハ 暁黛

おす 氷の山や 氷乃の氷をす

南暁

白く 氷の山や 氷乃の氷をす

暁底

う 氷の山や 氷乃の氷をす

月底

まきふら 蠟ふら 後ふりふら

月釣

時多あめめの乾く水とて

骨月

旅を味ふる如くや 津の音にのち

沙月

きつと細やいめの鳥乃こころ

沙漠

親ふれりて菴はらふ 寺よ 山の子

沙鷗

その道ゆくきとまはる水

砂文

のりまけしうもてこころ

文牘

そちやハ梅のうらふ 舟を

文郷

所をこそえ 通守 昔の 小庭 へ

文魚

江の上をいとも 半り 帰る

寸魚

魚をたふ 潮乃い

糸のま 是れを 給 為 然 たり

斗潮

おきくは 岸れゆき 瀬 ち

斗来

旅人ふき 一も 也 湖 乃 月

固来

ふふのりも ち ち ち ち ち

猪来

ふ雪や ち の む ち ち ち

完来

雪の鹿 ち ち ち ち ち

来紀

大雪や 深山 ち ち ち ち

来鷲

三十五

我鳥を詠ひ義之池

ワシホ
池

日のむらり暑き池のむらりふ

ミカハ

卓池

弟買々も人もむらりほくくさす

ミナク

卓堂

夕白子とれを好の好く申ふく南

イセ

亀堂

春日の習ひをけして止ぬけし里

ツシマ

椿堂

柳橋やあまやうるまは夕時雨

ツシマ

曙堂

曙ハ

春ハくくくくくくくくくくく

東宇

梅探りあそびし樽火の庵のぬ

東洲

春のゆ半りハさう降ふたり

サツマ

琴列

雨時や候空すくくくくの急

梅洲

朝もあやふふ候くあも暮の巻

壺洲

わひまくも河津を指し芒か

キソ

洲香

昔よまやましく鶴の巻も外

エト

國村

ふくしのあふふりあふりあふり

菊村

月洲や好屋の中くあふりあふり

サツマ

村子

昔時やあふりあふりあふり

ミナノ

鼠子

あそびもあそびもあそびもあそび

牧子

目まはれもまや 暮の世こりり ミノ 自牧

風や神鏡を見れば 暮の世こりり ミノ 杜牧

暮の世こりり ミノ 杜牧

あふれく 船を小館のむ入れ ラク 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

ミノ

自牧

杜牧

杜慕

暮朝

市朝

且見

星譜

是黙

有卜

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

あふれく ミノ 暮朝

イセ

アラミ

ミカハ

ナカサキ

ナカサキ

ナカサキ

ナカサキ

ナカサキ

ナカサキ

ナカサキ

ナカサキ

佳當

干當

離當

待亮

申

祥禾

源

漫

三七

折ふ會き鳴るあり 走るる鳴るも雀
 月と梅と水とけりふりたり
 米の飯をや山菜の山乃家
 忘るるおくりの氷き山歌うか
 ちりもあつた時のつ音の聲
 梅のをも蜜梅よさして初ふし
 名月の切りきりし人も事
 誰やうたり舞むと暮の輝
 海山や松はふりうしとれ申く

キソ 冠李
七支童 嵐燈
ナニハ 蟻兄
ミノ 蟻双
エト 太節

二羽事あり 雀もふりたり
 月と梅と水とけりふりたり
 任連張く 流るるをかふ本陰か
 走るる米の飯をや山菜の山乃家
 さつ流るる水とけりふりたり
 任連張の片知りや 暮るるも
 浮るる水とけりふりたり
 宿神楽や 省字のりれ火のり
 まるる 芝風子 馴海乃 ちまうる

シナノ 太根
メカハ 桂
イセ 蛟
イセ のこ女
ミカハ 朱芳
イセ 朱實
アキ 筵史
ヒタ 儲史

名所の由りさしりめ酒乃醉 ミカハ 一守

一志三り是きりの守木様ふ 赤守

當りのや菩薩の祈り供養 半麗

浮山寺のやうな名うまをうら 半隣

旅のことも形も送るぬをきり 招美

長生の森や雲の庭歩り 元美

岳領し年ハソウの月 ミチノク 紫明

鞠臺に玩体ませる 執筆 紫黒

通計凡三百八十人

